

Title	<批評・紹介>片倉穰著「ベトナム前近代法の基礎的研究：『國朝刑律』とその周辺」
Author(s)	山本, 達郎
Citation	東洋史研究 (1988), 47(1): 188-196
Issue Date	1988-06-30
URL	http://dx.doi.org/10.14989/154224
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

片倉穰著

ベトナム近代法の基礎的研究

——『國朝刑律』とその周邊——

山 本 達 郎

本書は日本におけるベトナム法制史研究の最初の専著であり、著者が一九七二年から八六年までにわたって發表した二三篇の論文を集めて改訂増補を行ない、それに新しく一つの章（第二篇第七章）を書き加えてある。

本文は三篇と附篇とに分けられており、第一篇は『國朝刑律』前のベトナム法」と題して、それに四つの章が含まれている。第一章は「中國支配下のベトナム法試論」で、まず中國法がベトナムに波及した最初の時期として、南越から始めて後漢の初めの「馬援の政治」までを區切り、次いで馬援以後の魏晉南北朝までを前期、隋唐を後期として、中國諸王朝支配下の法を論じている。中國法がベトナムに大きな影響を及ぼした一方、ベトナム側には中國に對する強い抵抗があったこと、ベトナムが獨立王朝を立てるに當って官僚制の形成、皇帝權力の確立などの要請に應える内實を中國法が持っていたこと、獨立王朝の李朝・陳朝などが唐律の系統の法律を施行しても大きな混亂が起きなかったのは、それまでに受け入れ條件の成熟があったと考えられること、中國法を繼受すると共に地域社會の慣習法がそこに反映していること、などに注目すべきことが指摘されている。

第二章「李朝刑法考——主として刑罰體系について——」において、著者は獨立後のベトナムで黎桓の時代に律令を定めたという所傳があるものの、最初の本格的な成文法典は李朝太宗の時代（A.D. 1042）に頒布された「刑書」であったと認め、唐律に見られる笞・杖・徒・流・死の五刑が行なわれたことを指摘し、笞刑については史料を缺くが、他の四刑に關する事例を考察し、杖・徒・流の各刑には刺面・刺字が併加されたこと、死刑には斬・梟のほかに後代の凌遲に當たる劊があり、手足を切斷する身體刑も行なわれ、中國で死刑に次ぐ重罪とされた配役も實施されたこと、ベトナム法の一特徴である賠償制が取入れられて、年齢の高下に基づく贖罪の規定などがみられることを述べ、他方で私的制裁ないし復讐が法的に限定的に認められていたと推量し、總じて李朝の刑罰は次の陳朝のそれに比して相對的に寛容であつて、その理由としては李朝時代に盛行した佛教の影響を想定してよいことが説明されている。そして續く第三章「李朝の上木馬」においては、刑具（獄具）の一種として木製の馬があつて、國事犯その他の重罪人をこれに乗せて市中を引き回し、衆人に見せる一種の公衆刑があつたことを説明している。

第四章は「陳朝刑法雜考」と題されており、著者はまず法典編纂の沿革を辿つて、太宗の初期に「律令條例」の制定（A.D. 1226）に續いて『國朝通制』二〇巻が作られ（A.D. 1230）、その中に『刑律』が含まれていたと認め、その後に「刑律諸格」を定めたという記載があつて（A.D. 1244）ここに始めて格が現れており、裕宗即位直後（A.D. 1341）になつて『皇朝大典』と『刑書』が作られたことを指摘し、文書の書式としての格式の類も制定されたと認めている。そして刑罰體系については五刑に即して考察を進め、杖刑に

關しては杖殺される決杖死の事例に注目し、徒刑については服役年限によって差別する唐の形式を継受せず、服役する所屬集團と役務の内容によって差等を設ける獨特の方式を採用しており、公田勞働に使役される田宏と、兵士となつて雜役などに驅使される牢城兵とが區分されていたほか、犒甲兵・社兵・宋兵など多種の服役形態のあったことを述べ、流刑については唐のような居住地からの里數による區分方法を踏襲しなかったと見られる方式が存在し、次の黎朝の流刑三等に續いて行く流近州・流遠州があるはかに流塞頭・流惡水洲などがみえ、それらの間には等級が設けられていたようであるが、それが三等であつたとすると流惡水洲などは死刑に次ぐ最重刑であつたらしいと言ひ、徒刑・流刑には刺面と加杖、或は兩者の中の何れか、を併科するのが一般であつたと見られること、また死刑に關しては斬・梟・陵遲（凌遲）の三等級が基本だつたらしく、絞刑は文獻に見當らないこと、更に五刑以外に手足を切斷する身體刑として別が行なわれたことを述べている。陳朝の刑法を考えるためには黎朝の安南志略に簡略ながら重要な記載があるので、著者はそこに現れる諸事項を取りあげて、謀反罪において親族まで殺戮する緣座規定があること、殺人の場合に人命賠償金が存在したと推量してよさうなこと、姦通罪の場合に私的制裁（復讐）から賠償に移行する動きが見られること、官吏を殺した場合に被害者の官位に應じて錢（償命錢か）を出す規定が存在したこと、同等の身分相互間の鬪傷行為においては、最初に殴つたものが罰せられたこと、詐偽・偽造の場合の刺面と遠徙、斬罪となる強盜と區別された竊盜に累犯加重の原則があり賠償制が存在したこと、他人を誣つて告訴した者は誣告したその罪によって罰せられたこと、などを説明してい

る。これらを通觀して陳朝の刑罰は甚だ苛酷であつたことが認められ、象による獸殺も存在していたが、苛酷なのは陳朝支配層が自らの王朝支配と王權維持を目指したところから來たであらうと述べている。

第二篇は『國朝刑律』の基礎的研究」と題され、七章に分かれている。第一章『國朝刑律』（『黎朝刑律』）について「はこの法典の構成と内容に關する全般的かつ基礎的な問題を取上げて検討したもので、まずテキストに關する問題としては、黎朝（A.D. 1428～1527, 1533～1780）の立法活動は太祖初年の詞訟律令の議定（A.D. 1428）、例律の頒布（A.D. 1430）に始まり、太宗の大寶年間（A.D. 1440～1442）に阮鷹が編したと傳えられる律書（六卷）が作られ、聖宗の光順九年（A.D. 1468）には『國朝刑律』と稱する刑律が存在したことが知られるが、同じ聖宗の洪徳年間に出來た洪徳刑律がほぼ踏襲されて行つて現在傳わる『國朝刑律』・『黎朝刑律』（寫本）になっていることを述べ、七二二の條文から成る國朝刑律に、避諱のための特殊な文字や俗字・略字・別字、數字を表わす場合の大字、の使用が見られることを説明している。次いで『國朝刑律』の構成を考え、(1)同書と(2)『黎朝刑律』、ならびに(3)兩書に含まれている多くの條文を收録しているところの『歷朝憲章類誌』・刑律誌の三者について、所收の諸條文の對照表を作り、刑律誌が他の二者より約二〇〇條少い相互の關係を説明し、續いて『國朝刑律』の篇目と『唐律疏議』・『元史』・刑法志・『明律』の篇目との對照表を掲げて、『國朝刑律』が母法たる唐の律を基本的に繼受し、かつ、明の律をはじめとする中國法の影響を蒙りながら、ベトナムの國家と社會の現實に對應し得る獨自の特色を持つてゐることを述べている。

そして『國朝刑律』に實刑制度と賠償制度との二つの原理が並存しており、賠償はカンボジア・タイ・ビルマなどに共通してみられる賠償制の一環として理解できるという見通しの許に、中國系でありながら獨自の特色を示す笞刑五（一〇—一五）・杖刑五（六〇—一〇〇）・徒刑三（役丁・役婦、象坊兵・炊室婢、種田兵・春室婢）・流刑三（近州・外州・遠州）・死刑三（絞・斬・陵遲）の五刑の外に罰錢・貶資（貶爵）・罷職のあったことを説明して、これらの刑罰記載が現れる頻度を篇目別に集計した表を掲げ、またその他にも充軍・補軍・別・令衆三日などの刑が見えており、他の文獻によると髡刑もあったらしいことを指摘し、また『國朝刑律』には複数の刑罰を併記した條文が多く、中には「以罰貶徒流論」のような例もあって、裁判官が一定の枠内で刑の選擇ができる相對的法定刑主義の精神が刑罰の種類と分量を嚴格に規定する絕對的法定刑主義の考えと並んで採用されており、このような複數刑罰の連記が官吏に對する罰則規定の中で多用されていることを述べている。そして『國朝刑律』全體を通觀すると刑罰の定め方が柔軟で彈力的な性質を持っていることを強調し、それが國家の性格と特質を考察する手がかりになることに注目している。

第二章以下は中國法とは異なるベトナム法の獨自の性格を取り上げて論じたもので、第二章「徒刑に關する考察」においては、著者は男女それぞれ三種類（前記）の徒について説明し、刺墨に關しては項（うなじ）に黥したものと認め、中國の場合と異って徒刑に期限がなかったこと、徒刑囚を軍に配する方式があったことに注目し、刑律全體としては、徒刑囚が社・軍・官廳などの自分が所屬する集團や機關において役務に従事するものと、これらの集團や機關を離

れて特定の勞務に従事するものとの二つの種類があつて、前者は村落や集團の機能維持に必要な勞役を提供させるものとして、そこに共同體的意識の表れを認めている。徒刑はその全部六種類の名稱が身分的用語で示されていて、それによって等級と服役内容が判別できようになっているが、その基礎には農業と手工業における分業の展開と國家によるその身分的編成があつたと認められ、また王朝權力による勞働力の收奪という意圖が強く作用していたことが説明されている。第三章「罰錢小考」において、著者は、『國朝刑律』に罰錢または罰を他の刑名と併記する條文がある一方で、罰錢または罰を主刑扱いして他の刑名を併記しない條文があり、後者は全體で百例以上に達するが、これを篇目別に數えて表示すると、違制章・斷獄章に集中しており、罰錢を適用する主な對象は王公・勢家・官吏などで、官吏は公罪のみならず私罪でも輕罪のときに科せられたこと、罰錢は一等（五〇〇—一三〇〇貫）、二等（二〇〇—六〇貫）、三等（五〇—一五貫）に分けられているが、この原則を逸脱した額（二貫・三貫）を規定した條文もあること、罰錢は國家に歸屬する金で、私人の間で受け渡しされる賠償金とは別箇の、財産刑であつたことを説明している。

第四章から第七章までは、著しい特色を持つ賠償金を取扱つたもので、第四章「生命の侵害に對する賠償金」では、まず『國朝刑律』の賠償制一般の性格として、賠償は他の實刑に併せて徴されたもので、賠償の支拂によつて實刑を免がれるものではなかったこと、元代法で賠償が實刑を或る程度低める働きをして、賠償制と實刑制とが折合つた形で結合していたのとも異つていたことを確認した上で、殺人を犯した加害者が、しかるべき實刑を科せられると同

時に、被害者の遺族に支拂わなければならない「償命錢」について考察を加え、それが人命の價值を九段階に分ける段階差等制と各段階ごとに具體的金額を明記する定額制をとっており、最高の一品從一品が一五、〇〇貫、最低の庶人以下が一五〇貫で、その間に百倍の差があったこと、夫が妻を毆傷して死に至らした時に妻の出身集團（實家）に償命錢を支拂う規定があつて、妻が夫とは異なる血縁集團の所屬員と考えられていたこと、殺人者が償命錢を自力で支拂う能力が無い時に、それを宗族や郷里にまで範圍を擴大して徵集したらしいが、後にその際の宗族や郷里の連帶責任が輕くなる傾向になったと見られること、また他の史料によると惡牛が人の命を奪つた場合に、その持ち主が牛に代つて償命錢（減額分）を支拂ひ、加害牛にもなんらかの處置を加える規定があつたこと、償命錢のほかに葬儀の費用に充てる葬錢、七七日の法事を營むための齋七錢、孟蘭盆の法會費用に充てる孟蘭盆錢などがあり、葬錢は償命錢を科すほどでない程度の殺人犯に命ぜられたこと、人命賠償制度においても、實刑の場合と同様に、公罪と私罪、有意犯と無意犯を區別して金額が定められていたことなどを論じている。

第五章「侮辱と傷害に對する賠償金」においては、各種の賠償金の中で、他人の名譽や身體への侵害などに對して、一定の實刑と共に併科される賠償金として、謝錢・懺謝錢・傷損錢の三者を取上げて論じている。謝錢は言説的もしくは物理的な行爲によつて他人の名譽や體面を著しく侵害するような無禮・侮辱行爲に對する謝罪金であつて、犯姦・闖殿・罵詈がこれを支拂う基本的な罪名で、謝錢の額の算出は償命錢の場合に準じた被害者の身分を勘案する定額制で、最高額は最低額の百倍に當ることが表示されている。謝錢が適

用される罵詈罪の適用範圍は唐明律よりも擴大されており、また外國からの客使への罵詈に對しても科せられたことが指摘され、家族や親族間の謝錢には具財と親告という二つの問題が絡んでいたことが述べられている。懺謝錢というのは、死者もしくは死者の靈を侵害した宗教的感情を害する行爲に對する謝罪金で、闖殿罪の謝錢規定に準據して算出されており、傷損錢は身體の損傷部分に對する賠償金で、身體の損傷部分に應じて、あらかじめ具體的に金額を定めておく定額賠償制であつたこと、また謝錢に廣狹の意味があり、懺謝錢を指したり損傷錢を包括したりした場合のあつたことが説明されている。

第六章「財産の侵害に對する賠償金」で、著者はまず『國朝刑律』二八條の倍贓律を詳細に検討し、贓、即ちある財物の奪取または授受が犯罪を構成するようになるその財物（正贓）を基準として、各種の賠償の場合にどのように賠償額を決めるかという、この刑律獨自の基本規定に吟味を加え、この條文では倍贓が二種類に大別されていて、公的財産の不法取得の場合には「二分」を賠償させ、私的財産の不法取得の場合には「一分」を賠償させ、故意犯と再犯の場合は、甚しいものは「五分・九分」というように賠償額を加増し、不法に獲得した財物自體（正贓）は、それが官物なら官司に、私物なら本來の所有者に返還させるが、私物の贓でも原告と被告の兩當事者が共に罪に問われるような性質の贓や、本來の所有者が存在しない贓は官に收めることとなっており、正贓以外に支拂うべき倍返し分（倍分）については、これを十等分して一〇分の八を本來の所有者に、一〇分の二を官司に與えることにしており、更に後者を官で關係者に配分する方式を説明し、この何「分」という

のは正贓と並行してその何倍かを支拂う意味であることを論じ、また賠償制度にはこのような倍額支拂の外に同額・減額支拂の場合があつて、同額は不法領得の意思が見當らないような財産侵害行為や、官吏の公罪その他に適用され、減額は家畜の殺傷や、共犯や従犯の場合などに用いられたこと、また財産侵害に對する賠償は家族・親族關係や主奴關係の範圍でも無縁でなかつたことを述べている。

第七章は「勞役等の侵害に對する賠償金」と題して、諸種の勞役・役務の横領やそれらの不履行という形の侵害に對する賠償を取扱っている。著者は『國朝刑律』で功備錢または備功錢と呼んでいるのは、官私の奴婢、典雇人から民丁・軍丁までの廣範圍の諸身分で、國家あるいは私人に對して一定の役務を有するものが逃亡したり、彼等を私役したりした場合などに、一日につき定額三〇文を徵する賠償金を指していたことを述べ、また賦役錢と課役錢は類義語であると見做し、これらは軍丁や民丁の逃亡などによつて、毎年國家に對して負擔すべき法定義務を不法に回避したために、國家に一定の損失を與えたときに徵されるもので、一年につき三貫を基準として算出されており、幫助犯・從犯から減額分を徵した事例もあり、犯罪の態様その他の條件が加わると基準額の倍額を徵した事例もあつて、ここにも倍額・同額・減額の原理が機能していたことを認め、また軍人が番役義務と大集軍期・校閱時などの諸義務を履行しなかつた時に、實刑に附して徵される缺番役錢や缺目錢などがあることについて説明している。

第三篇は「ベトナム前近代の身分と『國朝刑律』」と題して二章に分かれている。第一章は「ベトナム前近代の奴婢——身分として

の奴婢をめぐる基礎的考察——」で、はじめに奴婢・奴隸制の研究状況を概観し、續いてベトナムの諸文獻にみえる奴婢を指す諸用語を集め、宏・宏奴その他の特別な名稱を解説した上で、これらの用語の分類を行ない、また各時代の史料を用いて、奴婢所有者が自己の奴婢に刺墨、とくに刺額を行なつたこと、龍の刺墨は龍崇拜の表れで、李朝時代に奴僕に龍の刺墨をするのを禁止したのは、龍崇拜を共通の習俗とする習俗共同體から家奴を排除したことを意味する旨を述べ、次いで『國朝刑律』の奴婢に關する諸規定を検討して、それらには中國律にない規定、『唐律疏議』を繼受した規定、『明律』を部分的に参照したと目される規定があり、主人に對する奴婢の犯罪に科せられる刑罰は唐律のそれよりも一等級く量定されることとが少なくなかつたことを記し、財ならびに奴婢の所有主體は主なし家主と呼ばれたが、「主」は「現實の所有主體と家産分割の權利（得分權）を有する同居家族を指稱する語であつた」と推論し、王侯などに所屬する特定の家奴と良民との間の婚姻は禁止されたのに一般的な良奴の通婚禁止規定がまつたく存しないことを問題として、禁止規定が見當たらなくても、良奴の通婚が法的に容認されたとは思はず、それは當時の奴婢所有が王侯・公主や官吏らに集中していたという實狀に起因したと考え、また官奴婢は私奴婢よりも厳しい法的規制下に置かれていたことを指摘し、奴婢は法的には制限能力者で、おおむね彼らは刑事責任を追及されたが、民事責任の方は良民並みにそれを追及されることは少なく、主人がその代當責任を負うことが多かつたと推量している。

第八章は「ベトナムの養子について——一八世紀以前における養子の實態と養子政策を中心に——」と題して、假子・義子を含む廣

義の養子を扱い、まず養子關係を示す各種の用語を集めてから、各種の史料に見られる收養の事例を掲げている。ベトナムが中國から獨立した初期の政權には、同族ないし擬制的血縁を中核とする家父長的支配の性格が強かったが、これは中國における假子の流行と無關係ではないにしても、そこにベトナム独自の基盤を考へるべきこと、ベトナムでも中國のように官吏には官蔭の特權があつて、長子ないし衆子が蔭子として官位に就く規定があつたから、官吏の收養行爲には規制が設けられていたこと、異姓養子がかなり廣く行なわれたらしいことを述べ、養子に對する家産分割に關する『國朝刑律』の規定を検討し、養子と實子との間に均分の原則が働いていないことその他、中國の場合とは異つた點を指摘している。

附篇の内容は「ベトナムの馬をめぐる二、三の考察——李・陳・黎の三王朝を中心に——」となつてゐる。ベトナムでは古く中國の支配時代に既に馬が齎され、宋代には占城や眞臘にも馬が存在したことが知られてゐるが、李朝では馬の輸入が積極的に行なわれていて、互市による買馬があつたほか、中國の皇帝からの下賜や、戰爭もしくは、武力による獲得があり、特定の階層の間で乘馬として愛用され、軍馬としても利用されたこと、陳朝では文武百官の馬の所有に身分的規制を加えたこと、黎朝では牧馬が行なわれたために馬匹の數が増加し、馬が乘馬・軍馬あるいは驛馬として、これまで以上に重要な役割を演じるようになったことを述べてゐる。そしてこの附篇の後に「後記」を記し、更にその後七三頁に及ぶ「ベトナム前近代法史年表」と索引(二〇頁)を附載している。

以上片倉氏の著書を私なりに紹介してきたが、その内容から見

て、同書は題名通りのベトナム前近代法の基礎的研究を見事に展開させたものである。史料の少ない古代から陳朝までに關しては、斷片的な記載を略網羅して考察を行つており、『國朝刑律』に關してはその全體の構造と性格を究明し、全篇を通じて中國の法典との比較を行ない、ベトナム側で中國法の條文の取捨選擇を行つていて、唐律などから條文を取り入れると同時に、それに改變を加へ、またベトナム独自の條文を作成したことを明らかにすると共に、その背後にベトナム社會の傳統と、各時代の諸情勢が存在したことを推定してゐる。そして片倉氏は『國朝刑律』の独自の性格を解明する作業において殊に特徴のある賠償金と徒刑について大きな成果を齎し、從來解釋困難であつた多くの問題を解いてゐる。また同氏の著書には關係史料や從來の諸研究が廣く參照されてゐるので、それはベトナム前近代法史年表と共に研究者に多大の便宜を與へる。註の中にも、奴婢の身分に關して、各種の用語がどの文獻のどこに現れてゐるかを示したもの(四三四—四三九頁)など、便利なものがある。このような特長を具えた片倉氏の著書は、今後『國朝刑律』を研究するものにとつて、まさに必須の文獻と言わなければならない。

もっとも、多くの課題に答えを出すと同時に新しい問題を提出している同書には、疑問となる箇所も存在するので、ここにその幾つかを取上げておきたい。奴婢に關する研究で、『國朝刑律』に良奴婚姻(良賤婚姻)の禁止規定がないという問題もその一つである。私は曾て黎朝の婚姻法について考察した際に、「安南の奴隸に關して……黎朝に良賤通婚の禁止がみえないといふのは、その地位を考へる上に重要な示唆を與へる。」と述べたことがあるが(『東方學

報』東京八、一九三八年、二八六頁）、片倉氏はこの問題を論じて（四一六―四二〇、四二八頁）通婚禁止の一般的规定が「明文化されていなくても、やはり良奴の通婚は法的に認められていなかった」と考えたと共に、明文化のない理由を求め、『國朝刑律』の「公侯家奴公主」の横暴を抑えた三三六條を引いて、「王侯らの家奴が、その主人の權勢に依據して良民と通婚し、身分的秩序を弱す狀況が存在したからであらう。すなわち、當時のベトナムで良奴間の秩序を維持し強化するためには、一般的な良奴通婚禁止令を發布するよりも、特定身分を主人とする家奴に直接規制を加え、身分的拘束を強化することのほうが、きわめて切實かつ重要な問題だったからである。」と述べ、その背景として私奴婢所有が王侯・公主・官吏の諸身分に集中していたことを推定しておられる。しかし私は良賤通婚禁止の明文がないのは、『國朝刑律』では良と賤との身分的差違、或は境界線、が唐律程に明確ではなくて、明文化する必要がなかった、或はすべきでなかった、という狀況があつたと考える方が自然ではないかと考えている。片倉氏は『國朝刑律』に『唐律疏議』のような「良賤相姦」「良賤相毆」の明文——『疏議』では雜律の「奴姦良人」、鬪訟の「部曲奴婢良人相毆」の條にそれが見える——がないことにも注意しておられるが（四一九頁）、『疏議』の方で賤の罪を良より重く罰することになっているのに「刑律」でそれが無いのも、良賤婚の場合と一連の取扱いで、黎朝の方で唐代程に良賤の區別が明らかでなかった爲であると見てよいのではあるまいか。黎朝の立法者は『唐律』には精通しており、その條文を取捨して採擇しているのであって、良賤關係の右の三種の規定を落しているのは、それに積極的な理由があつたと解する方が自然ではなからう

か。殊に姦通の場合は、『國朝刑律』に唐明律には存在しない「姦通章」という篇目を特に設けてこれを強調して取扱つているのであるから、良賤間の規定を格別の理由が無くて落としているとは考え難い。問題の『國朝刑律』の三三六條は「公侯家奴公主」の「托威勢、占人田土、脅娶良女、及凌罵人者、」を禁じたもので、唯の婚姻ではなくて脅娶であるし、この條文の性格はそれに續く三三七條・三三八條の「勢家」の横暴を禁じた規定と一連のもので、これを「良奴間の秩序を維持し強化するため」の規定とは認め難い。三三六條では「家奴」が罰せられたばかりでなく、「家主」もこれを容認すれば罰せられることになっていて、家主の責任が問われているのである。『國朝刑律』で奴婢の主人に對する犯罪に科せられる刑罰をみると、唐律のそれよりも軽く量定される場合が少なくないが（四〇三―四〇九頁）、これも黎朝の方で良賤の區別がより小さくなつていたことの表れと見る事ができるであらう。試みに良賤という文字が用いられている頻度を數えてみると、『唐律疏議』では良が一五四回、賤が七六回、律の本文だけに限ると良（良人）が二二回、賤が三回（同一條文）現れているが、『國朝刑律』では良が五箇條に各一回（二九一・三三八・三六四・四六一・五三六の各條）、賤が一回（二九一條）現れているだけである。『唐律』の條文數が五〇二、『國朝刑律』のそれが七二であるのを考慮に入れてみると、巨視的に見て、後者において良賤の區別を念頭に置いた規定の數が減少していることが認められるであらう。『國朝刑律』で唯一一回賤の文字が現れる二九一條は奴婢に放書を與えてこれを解放したあとで、またこれを強壓的に賤とすることを禁じたもので、もともと『唐律』戸婚章の「放部曲爲良」の條に基いており、「已給

放書而壓爲賤者」という箇所は全く同文であるが、二九一條で取扱っているのは身分の變更に關する問題で、賤の身分にあるものの行動に關する規定ではなく、また罰せられるのは奴婢とされた人ではなくて、奴婢にした人であることに留意する必要がある。二九一條で賤というのは、奴婢のほかには奴奴その他をも含めているのではあるまいか。『唐律』戸婚章の方の規定は部曲・奴婢が混在していてやや複雑であるが、二九一條に相當する場合の罰則は徒一年半と見られるのに(四〇二頁)、二九一條の罰則は「笞伍拾貳壹責」で輕くなっているのであって、これも黎朝における良賤の差違が唐のそれよりも小さくなっていたことを示す事例であらうと思われる。一般に法的に良民よりも下位にある人間を取り扱う場合には、社會の階層として考えられているか、主従關係として考えられているかを區別して用語を整理しなければならず、兩者のほかにその混合形をも把握する必要があるが、『國朝刑律』の用語の場合は主従關係に重點があつたと見るべきで、良・賤の用例が少なくて「賤民」の名稱が幾種類もあるのは(四三九頁註48)、それと關係があるのではなからうか。このように見てくると、『國朝刑律』には良賤婚禁止規定を置かなければならない必然性が、なかつたと考えるべきではないであらうか。『國朝刑律』で主従關係に重點があることの證明は改めて論じることとしたい。なお奴婢關係の用語については、四

一八條にみえる部曲も併せて考えることが望ましい。

片倉氏は『國朝刑律』の財産刑の中に、「最高に重い刑として」「家産沒官」「田産沒官」「田産還夫主」などの形式で示された財産沒收刑」があると述べておられるが(三一九頁)、これら三者の中で前二項は問題ないとして、第三項は官への財産沒收とは認められな

い。「田産還夫主」は四〇七條に見えているが、奴が姦通で斬罪になった場合にその田産を主人に歸屬させる規定である。又同氏は一般人に對する罵詈訛に關して、それが唐律になくて明律に現れることを述べた上で、『國朝刑律』に「一般庶民および庶民間の罵詈訛が存したことを推定させる記載を採し當てることができる。」として、四八〇條・四八九條・六三七條を引用し、それに基いた推論を展開しておられるが(二七八—二八一頁)、これらの條文に記載されているのはみな「毆罵」の場合であるから、それだけでは毆打を伴わない罵詈訛の存在を證明することは出来ないであらう。

本書が出版された同じ一九八七年には、また Nguyễn Ngọc Huy, Tạ Văn Tài 兩氏が Trần Văn Liêm 氏の共力を得て、*The Lê Code, Law in Traditional Vietnam—A Comparative Sino-Vietnamese Legal Study with Historical-Juridical Analysis and Annotations*, 3 vols. Ohio University Press. を出版したのを注目しなければならない。これは Harvard Law School で「東アジア法律研究」の事業として久しく續けられてきた研究の成果を發表したもので、第一冊(二九三頁)ではベトナムの法制史を概説し、この本の編成、『國朝刑律』の特色を解説した上で、同「刑律」にみられる七二條の條文全部の英譯を掲げ、第二冊(三六〇頁)には各條に對する註釋を載せ、第三冊(三六三頁)にはこれらの各條と唐律・明律・清律・阮律の各條との對照表、黎朝・阮朝時代の文書の書式例、ベトナム支配者年代表、Samuel Baron のスケッチ、文獻目録、用語集および索引を収めている。この書も『國朝刑律』の研究者にとつて必讀の文獻である。片倉氏の本も Huy 氏等の本も、別々に研究を進めて別々に發表したものの

で、これらを比較対照してみると、互に相補うところがあると同時に、そこに多くの新しい問題が展開してくる。それは個々の條文や用語の意味についても、問題の立て方においても、総合的な解釋においても現われている。E. H. 氏等の著書が「近代」な國家形成のための公法、個人の權利を守るための私法の展開に重點を置いて説明しているのも片倉氏の著書とは異なる著しい例である。これらの

兩書をも含めた問題狀況について、私は日本ベトナム研究者會議の第一回大會（一九八七年二月二三日）で「國朝刑律研究の現状」と題する報告を行つておいた。

一九八七年二月 東京 風聞書房
A 5版 六五四頁 二六〇〇圓